（様式２－１）

平成２８年度「特別支援教育に関する実践研究充実事業
（特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究）」報告書

団体名	鳥取県
研究開始年度	平成２８年度

Ⅰ　概要

１　指定校の一覧

設置者	学校種	障害種	学校名（ふりがなを付すこと）
公	特	聴覚障害	鳥取県立鳥取聾学校（とっとりけんりつとっとりろうがっこう）
公	特	聴覚障害	鳥取県立鳥取聾学校ひまわり分校（とっとりけんりつとっとりろうがっこうひまわりぶんこう）

２　研究テーマ

自立活動と各教科等の横断的視点による教育課程編成と指導方法の工夫

３　研究の概要

多様化する幼児児童生徒の実態を障がいの特性と発達の視点から把握し、自立活動と教科等の関連を通して調和的発達を促す教育課程編成のあり方を検討した。本研究は以下は（１）～（３）の３つの柱で取り組んだ。

（１）要因の分析に基づく実態把握の在り方

・諸検査やチェックリスト、観察等を通して、発達の段階や個人内差、認知の特性を把握し、学習上または生活上の困難との関連について研究チームで協議した。

・発達や自立活動に関する全体研修や諸検査の分析に関する学部研修を実施し、個々の実態把握に生かした。

（２）障がいの特性と発達に基づく授業づくり

・諸検査やチェックリスト、観察等をとおして把握した実態をもとに、指導内容や指導方法、必要な支援を検討し、個々に応じた授業づくりに取り組んだ。

・各学部で実施した授業研究会に外部講師を招聘し、指導助言を受けるとともに、学部研究の修正や改善を行った。

・実態に応じた指導と支援をテーマにした一人１授業研究会の実施や、学部ごとに授業を公開しお互いの授業力向上を図る参観ウィークを実施した。

・自立活動の重点目標や内容設定について検討し、自立活動の年間指導計画（個別の指導計画）の見直しを行った。

（３）APDCA サイクルとチームアプローチによる検証

・学部あるいはさらに小グループの研究チームを編成して、実態把握（Assessment）を重視したAPDCA サイクルの研究計画を立てるとともに、実態や指導と支援のポイントを共通理解し、各教

員が担当する教科や領域で授業実践を行った。一人１授業研究会の取組をとおして実践と検証をしながら、実態把握や指導と支援の修正や改善を行った。

4　研究の成果

研究の３つの柱の取組をとおして、以下の（１）～（３）の成果が見られた。

（１）要因の分析に基づく実態把握の在り方

諸検査や観察等に加え、特に就学前段階の乳幼児に対しては、独自に作成した発達段階表を活用し、個々の実態把握を行った。また、氷山モデルを用いて目に見える課題と目に見えない課題（発達の遅れや個人内差など）について分析し教科横断的に課題を整理する取組や、実態把握した内容を一覧表にまとめ指導の重点化を図る取組などがあり、多様化する幼児児童生徒の実態を総合的・多面的に捉える意識と仕組みができつつある。

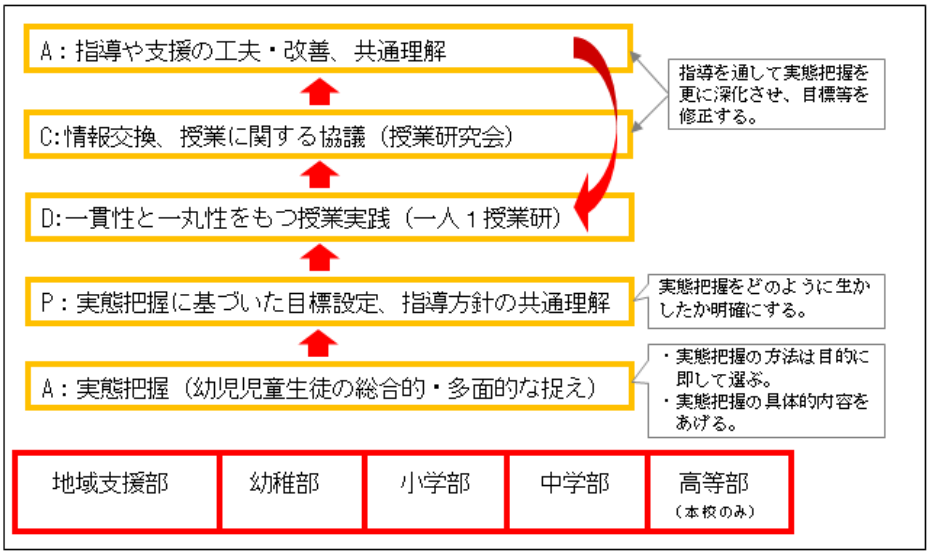
（２）障がいの特性と発達に基づく授業づくり

諸検査の結果や観察から得た情報を独自のカテゴリーでまとめ、幼児児童生徒の実態に合わせて自立活動の指導内容の修正や効果的な指導形態の検討を行った取組や、生徒の認知特性を踏まえた教科学習指導法や支援ツールを工夫した取組など、実態把握をもとに授業改善を行うことができた。一人１授業研究会は校内に公開し、広く参観を呼びかけるとともに、同じ研究チームのメンバーは日程調整を行い、お互いの授業を見合うようにした。同じ幼児児童生徒について研究授業を重ねることにより、子どもの理解が深まるとともに、一貫した指導と支援につなげることができた。

多様化する幼児児童生徒の実態をふまえ、これまで自立活動の指導で中心的に取り組んできた領域（聴能、ことば、発音・発語、障がい認識）だけでなく、自立活動の６区分２６項目で幼児児童生徒の実態を捉え、教育活動全体をとおして調和的発達の基盤を育てるという視点から、自立活動の年間指導計画の見直しを行った。

（３）APDCAサイクルとチームアプローチによる検証

学部あるいは小グループの研究チームで共通理解を図りながら、下の図のAPDCAサイクルで研究を進めるとともに、一人１授業研究会等をとおして研究の検証と修正・改善を行った。



以上のように、多様化する幼児児童生徒の実態を総合的・多面的に捉える意識と仕組みができつつある。学習の様子や児童生徒の自己評価からは、順序立てて考える力の向上や言語概念の広がり、論理的思考の深まりについて変容が見られた。

５　課題と今後の方策

（１）要因の分析に基づく実態把握の在り方

①課題

多様化する幼児児童生徒の実態を総合的・多面的に捉える意識と仕組みができつつあるが、取組の充実が必要である。

②今後の方策

各学部において検討した実態把握の内容や方法を継続するとともに、集めた情報の分析や関連性についてさらに充実させることによって、教科横断的な課題の整理と目標の重点化を進める。また、実態把握の取組と見直した自立活動の年間指導計画（個別の指導計画）の活用を連動させ、取組の充実と同年間指導計画の検証を図る。

（２）障がいの特性と発達に基づく授業づくり

①課題

自立活動と教科等の横断的視点による取組については十分な成果が得られていない。

②今後の方策

（１）で整理した課題と重点目標を自立活動と教科等の指導に効果的に反映させ、教育課程の編成や運用の検討を行いたい。また、次期学習指導要領の実施に向け、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」という資質・能力の３つの柱を意識しながら実践を進めたい。

（３）APDCAサイクルとチームアプローチによる検証

①課題

チームアプローチにより実態の共通理解や一貫した指導と支援を行う点で成果が見られた一方、チーム内の取組にとどまりがちであったことや、教科担任など学部を越えた連携に課題が残った。

②今後の方策

研究チームの再編成や、学校全体での情報共有・情報交換の在り方の検討、本校と分校との連携強化についても取り組み、改善を図りたい。

※鳥取県においては、法令及び条例・医学用語・固有の名称等の表記を除き、障害を「障がい」と標記